

メイドさんと
ご主人様の



140文字日記

作 ARM1475



登場人物

・ ご主人様

..... 28歳。いわゆるイケメン。職業は教師。私立皇南学院の中等部と高等部で美術の教師を務める。

良家の次男で芝浦にある高級マンションで自由気ままに一人暮らしをしていたが、両親から強引に住み込みで身の回りの世話をするメイド（A子）を送りつけられる。

好みは巨乳で顔や性格は二の次。基本、物事にあまりこだわらないサッパリした性格のハズだが何故かA子相手にツッコミが激しい。

A子が来て早々、部屋に隠していたマイ・フェバレット巨乳エロ本を焼き捨てられた事から「**この女は敵**」と認識している様子。

でもゲームの話になると意気投合するので何とか主従関係を維持出来ている。

ゲームが好きでヲタクの域にあるが、だが腕はいまいち。カッとなって壊した携帯ゲーム機は数知れず。

ゲーム好きだがエロゲーは苦手。自室で表情も変えずにエロゲーをプレイするA子に困惑する事もしばしば。

・ A子

.....本名不明。というか名乗らないのでご主人様も知らないまま。

黒髪のロングヘア。小柄で三白眼、貧乳というか幼児体型。年齢も不詳だが、大学は卒業しているとの事。運転免許証によれば24歳。

才媛で勝ち気な性格。辛辣な口調故に、ご主人様と衝突する事もしばしば。

家事能力は完璧だが、限度を考えない行動が多く、無駄な料理を作ったりして失敗する事も。

体型コンプレックスから巨乳を敵視し、ご主人様の部屋で巨乳のエロ本を見つけてしまった事から「**この男は敵**」と認識している様子。

しかし、ご主人同様ゲーム好きで、ゲームの話になると意気投合する。

コレクター的な面が強いが“集める”行為が目的である為、入手したゲームに対する執着力は意外にも無い。

その為、遊ばなくなったゲームはネットオークションに良く放出している。

またムツリスケベな性格で、エロゲーにも抵抗なく接する事が出来る。



第26話

「ご主人様...駄目ですそんな...」

「あ...駄目そこは汚——ああっ！」

「もう...我慢出来ません——」

「熱いっ！ご主人様の、中で暴れてて熱いっ！」

「あ、あ...イク、イツちゃうっ、あたし初めてなのにイツちゃう、あっ！ご、ご主人さ」

ガラッ！

「エロゲーをスピーカー全開でプレイするんじゃねえええ！」

第27話

「何、器量の狭い事を…」

パソコンでエロゲープレイ中だったA子は不機嫌そうな顔で、怒鳴り込んできたご主人様を睨み返した。

「アホダラ！モノには限度ってのがあつたろっ！そんなアレな音を外に出すなっ！」

叱られたA子は渋々エロゲーを止めて別のゲームを始める。

「ポスタル2も却下あつた！」

第28話

「では何で遊べば良いんですか」

「そういう問題じゃなくて！」

ご主人様は仰いだ。

「...あー。とにかく遊びたきゃヘッドホン使え。こっちは明日の準備で忙しいんだ」

「女子校に忍び込む準備ですね」

「新学期の準備だっつーの！ 俺は学校の先生で色々忙しいのっ！」

「エロエロ忙しい？」

「アホッ！」

第29話

「...そういやご主人様、何処にお勤めで？」

A子が傾げながら訊く。

「ん？あ、ああ、皇南学院中等部と高等部の...ん？」

その名前を聞いた途端、A子の顔が強ばる。

「どうした？」

「...そこ...母校です」

思わず吹き出すご主人様。

「一寸待てっ！て事はお前、俺の後輩かいっ！？」

「ええ？嫌あ！」

「何が嫌じゃ！」

第30話

「...まさかご主人様と同じ空気吸っていたとは」

「何その失礼な言い方。歳から考えるとお前さんと面識あってもおかしくないが、記憶に無いなあ」

「私もです」

「中学の頃からニートやってたとか」

「失礼な。大学卒業まで皆勤賞でした」

そう言ってA子は睨み、

「くれぐれも私の事、調べないように」

「ぬっ...」

第3 1話

即座に考えた計画に釘を刺されてご主人様は舌打ちする。

「その代わりに私もご主人様の過去など調べませんから」

「う...」

ご主人様はA子に懇願されたような気がして詰まる。

「...もっとも、知る気なんて毛頭ありませんけどねー」

思わずムカツクご主人様だが、思わぬ収穫に一寸得した気分にもなっていた。

第32話

ご主人様とA子はマンションの庭園にいた。

「この辺りはもう一ヶ月も降ってませんね」

異常気象と認定されるほどの猛暑に花壇は枯れかけていた。

「可哀想なので水でも上げましょう」

そう言ってA子はスカートをたくし上げる。

「おいっ？」

「？」

A子はきょとんとした顔で中から水筒を取り出していた。

第33話

「紛らわしい所にしまっなっ！」

「よく冷えてます」

A子はしまっていた保冷剤も取り出して見せた。

「そんなところに保冷剤とか水筒とか...四次元ポケットかそこは」

「便利じゃないですか」

素で答えるA子を前にご主人様は思わず仰いだ。

「...兎に角、人前でスカート開くなよ」

「嫉妬ですか」

「違うわ！」

第34話

「大体、そんな面倒な所に入れていたら歩きづらくないのか？」

「別に。鍛えてますから」

そう言って今度はスカートの中から5キロの鉄アレイを取り出した。

「...俺は突っ込んじゃいけなかったのかも知れない」

思わず後悔するご主人様であった。

「どうです、ご主人様もスカート履きます？」

「要らん！」

第35話

「私、ある事に気づきました」

そう言ってA子のご主人様をベランダへ案内した。

「ご覧下さい」

A子は汐留の高層ビル街方面を指した。

「あの真ん中の隙間」

言われてご主人様は目を凝らす。

「建造中のスカイツリーが見えます」

そこにはビルの裏から顔を出す第1展望台の端が。

「うわ、イラッとする」

第36話

「何あの中途半端な展望」

ご主人様は思わず眉をひそめる。

「それでもあのスカイツリーが見えるんですよ、この部屋から」

A子は嬉しそうに胸を張る。

「いや...流石にこの角度からでは微妙すぎるぞ...」

「しかも驚く事に時々、下から資材を持ち上げるクレーンも顔を出します」

「うわ、嬉しく無eee」

第37話

「何が不満なんですか」

A子のご主人様を睨んだ。

「これなら別に見えなくても良いじゃないか。自慢にもならない」

「とんでもない！」

そう言ってA子は今度は西の方角を力一杯指した。

「ここから東京タワーも見えるんですよ！」

その先には、ビルの屋上から顔を出す東京タワーのアンテナの先端があった。

第38話

「ご主人様...こう暑いと股間が蒸れませんか？」

「何故股間ピンポイント」

「だって、男はぶら下がってますし」

「蒸れとは関係無いし。あとチ○コネタ禁止」

「でもタマが擦れたり...」

「禁止だったろこのアマ。A子の場合スカートの中にモノ入れすぎなんだよ」

ご主人様は異様に膨れたスカートを睨んだ。

第39話

「えー、便利じゃないですか」

「何処の世界にスカートを鞆代わりにする奴が居るか」

するとA子は、ここに、と自分の顔を指した。ご主人様思わずイラッとする。

「...仕込むのも大概にしろよな。そのうちスカートがビリッと破け」

ビリッ!

「...あ」

驚くご主人様は、紙を破いてるA子を見て歯噛みした。

第40話

「ご主人様、前から疑問に感じていましたが、何故ふんどしをご愛用で？」

A子の問いに、ご主人様はしばらく唸り、

「んー、子供の頃から使い慣れていたってのが理由かな。他の下着じゃ落ち着かん」
「成る程。私も子供の頃から愛用してますから」

A子はそう言って胸を叩く。

「...え？ さらしを？」

第4 1話

「妙な事を」

A子は怪訝そうな顔をする。

「さらしは立派な下着じゃないですか」

「いやいやいや。あれは腹に巻くモノで、モノに寄っちゃふんどしの代わりに使う時も……」

「何故です？ 私の父上も不断から愛用していました」

「また硬派な親だな」

「包帯代わりに使えますし」

「チョットマテ」

第4 2話

「今包帯代わりと聞こえたが...」

「刺された時の血止めで重宝します」

真顔のA子を見て思わず固まるご主人様。

「...俺の両親の紹介で来てるから、アレな方面からの人脈もあり得るが、しかし詮索しないという約束だし...いや、訊くべきか」

「どうしました？」

「子供の頃からさらし巻いてたのか？」

第43話

「はい、愛用していました」

するとご主人様はしばし仰ぎ、

「...その、なんだ、俺は余所様の家の事情にはとやかく口出しする気は無いが」

「何が言いたいのです、ご主人様？」

A子が睨むと、ご主人様はため息を吐いた。

「そのさらしが胸の成長を阻害したんじゃないか」

今度はA子が固まった。

第44話

「ナナナナニヲオッシャイマス、ゴシュジンサマ」

急に口ボ語になるA子。

「...自覚はあったのか」

ご主人様はやっぱり、とため息を吐いた。

「何をおっしゃいます！　さらしに胸が押しつぶされるなんて、そんな話はアリエナイ」

珍しく動揺するA子。

「今更遅いかもしれんが、さらしはやめたら？」

第45話

「きゃ、却下！」

「知ってるぞ、お前、前に星に願いを掛けていたのを」

「ぎくっ」

「それにまた前みたいに俺のふんどしと混同するのも起きるし。大人なんだから少しは下着にオシャレしても良いと思う」

「……」

A子はその場で沈黙した。

「このさらし……父上から譲り受けたモノなんです」

「え？」

第46話

「ここに来る時、父上が餞別の品としてくれた物なんです」

A子はドレスの隙間に手を入れ、器用にさらしを外してみせた。

「...これを身につけていれば、いつも一緒だって父上が」

「...スマン、A子」

「はい」

「...どう見てもソレ、越中禪。端にヒモ付いてるし」

「おのれ糞親父っ」

その日よりA子はさらしを全部捨てた。

第47話

ご主人様はA子がPCの前で唸っているのに気づいた。

「どうした？」

「通販で下着を探していたら、一寸困った事になって」

「ああ、そういやさらしはやめたんだっけ。良いのが見つからないのか？」

「いえ」

A子は首を横に振った。

「探したんですが、私に合うヌーブラが無いんです」

「待てやコラ」

第48話

「どんだけ背伸びしてるんだ。ああいうのはお前さんには無理——アウチッ！」

思いっきりご主人様のスネを蹴るA子。

「何しやがるかっ！」

「人間諦めたらお終いだよって安西先生も言ってました！」

「知るか！ 背伸びしなくてもシュミーズ使えばいいじゃん！」

A子は困惑を浮かべる。

「ナニソレ？」

第49話

「へ？シュミーズ知らんの？」

不思議がるご主人様の前でA子はしばし傾げ、ああ、と手を叩いた。

「ひょっとしてスリップの事？」

「俺滑った事言ったか？」

「違います。今そういうのはスリップまたはキャミソールと言います。

今時シュミーズなんておばちゃんしか言いません」

A子はケラケラ笑った。

第50話

「別に間違っていないだろ、野郎は着ないし」

ご主人様はむっとして膨れてみせた。

「あれ死語なのか？」

「もうその名前は見かけません」

「へえ。でも何故使わない？」

「嫌だから」

「偉そうにブラなんか着けられる胸かお前」

A子はもう一度ご主人様のスネを蹴る。ご主人様は悲鳴にならない悲鳴を上げた。

第5 1話

「足癖悪いなお前！」

「失礼な事言うからですよーだ」

A子はあかんべえをした。

「ったく...」

「...ちゃんと試してみました」

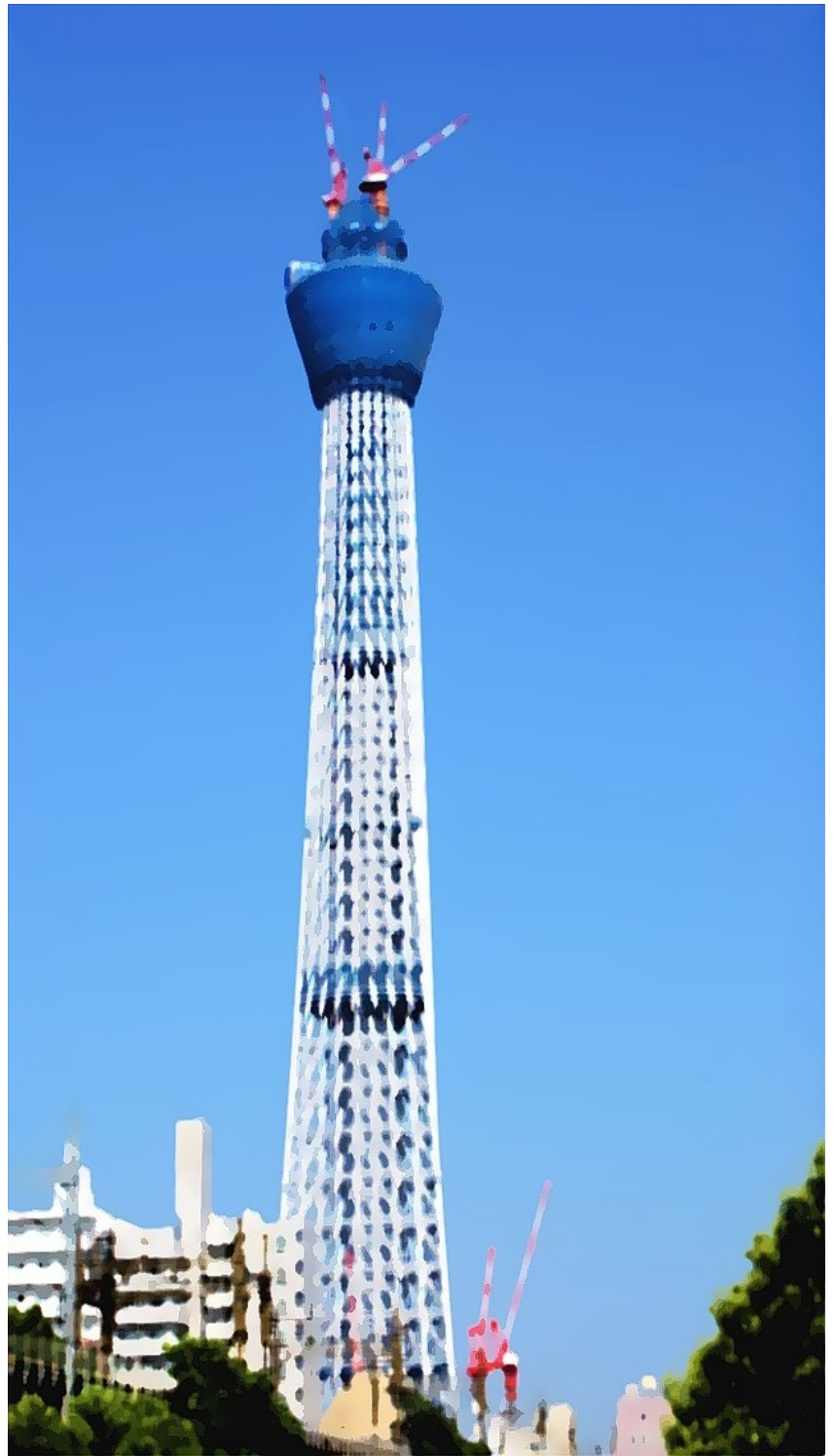
「ん？」

「...そしたら」

A子は何故か言葉を濁す。

「...小学生サイズも試してみたのに...大きすぎて...今時の小学生は私より体格良くて...」

ご主人様思わずもらい泣き。



それは土曜の夕方だった。

「ご主人様」

ご主人様が居間でくつろいでいた所へ、A子が愛用のネットブックを小脇に、畏まった顔でやってきた。

「とーとつですが、私、これを観に行きたいと思います」

そしてネットブックを開き、ご主人様にあるサイトを見せた。

「何このブッ細工な猫」

「マヌルネコ、と言います」

液晶画面には、例えるならアへ顔の、珍妙な顔をする、ずんぐりとした灰色の猫の写真があった。

「ヒマだったので壁紙になるようなモノを探していたら、たまたま」

「これは……」

ご主人様、思わず吹き出す。

「色んな野良猫を観てきたけど、これほどスゴイのはいなかったなあ」

「野良というか野生の、山猫です。中央アジアに生息してて、ペルシャ猫の祖先とも言われます」

「言われてみればペルシャ猫っぽいけど、これが先祖と言われたら流石に泣くわペルシャさん」

「でも、じっと見ると愛嬌ありますよね」

「確かに。しかし写真があると言う事はまだ生息しているんだよな」

「先ほども言いましたが、中央アジアに広く生息しています。日本にも動物園にいます。この子は王子動物園に棲んでるベッキーといいます」

「王子動物園……大阪じゃないか」

「そうなんですか？」

A子はきょとんとする。

「王子というものだからてっきり、京浜東北線の王子駅にあるものと」

「いやいやいや」

ご主人様は苦笑する。見た目は小学生のA子は、家事その他をこなす有能な女性ではあるが、一方で一般常識に疎い面もあり、それで失敗する事もよくあった。しかしまさか地理も苦手だったとは、ご主人様も意外だったらしい。

「流石に日帰りでは厳しいぞ」

「朝一で、飛行機か新幹線で」

「いやいやいや、慌てるなって。ソレ、ちょっと貸して」

言われて、A子はネットブックを渡す。

ご主人様はネットブックを使って、マヌルネコに関する検索を始めようとしたが、ふと、先ほどのマヌルネコの写真が紹介されていたサイトの一文に目を引いた。

「おや、マヌルネコって上野動物園にもいるじゃないか」

「上野って伊賀上野の？」

「お前わざとボケてないか」

「冗談です」

A子はしれっと言う。いつもの事なのでご主人様は苛つく事もなかった。

「というか上野動物園にも棲んでいるんですかその子っ」

少し興奮気味に訊くA子。意外な、そしてA子の珍しい反応に、ご主人様はちょっと驚く。

「良く読めよ。観たい気持ちをはやって見逃していたか？」

「あ、本当だ」

A子は返されたノートブックを見て驚く。

「上野動物園だったら昼過ぎからでものんびり行けるし金も無駄に掛からないぞ。そーだなあ、明日観に行くか？」

「観に行く？ ご主人様も？」

「来週の授業の準備はさっき終わったからな。たまには動物園も良いだろう」

というか、A子一人では何か問題起こしそうで心配だから、とご主人様は言いかけるが、慌ててソレは飲み込んだ。

「あ、ありがとうございます」

A子は少し戸惑うも、直ぐに笑顔で御辞儀した。

ご主人様は、A子もこんな顔をするんだなあ、とチョット感動した。

* * * * *

翌日。

二人はJR上野駅の公園口改札を抜けてきた。

「流石に日曜はこの辺りは混みますね」

「動物園だけじゃなく、美術館や博物館もあるからな。ほら、直ぐ向かいにある東京文化会館の先に見える建物、あれが国立西洋美術館だ」

「美術館の手前に、変な壁がありますね」

A子が指した方向には、生い茂った葉で作られた、壁のようなモノがあった。

「ああ、あれ。そうだ、あの裏観てくると良い」

A子は傾げるが、言われたとおりに駆けだし、手前のコンクリートの壁越しに壁の裏を見た。

「.....あ。アレ、もしかして」

「『地獄の門』だ」



A子の後を着いていたご主人様が後ろから答えた。

その青銅の巨大な扉は、西洋美術館の敷地に植えられた樹木の壁に埋もれるように鎮座していた。

「ロダンの、ですよ」

A子は不思議そうに訊いた。

「うん」

「でもソレって日本じゃなくて確かパリにも……」

「パリのロダン美術館だけじゃない。

フィラデルフィアのロダン美術館、チューリヒのクンストハウス、スタンフォード大学、ソウルのロダン・ギャラリーそして静岡県立美術館とこれを含めて7つある。

そしてどれも本物だ」

「本物が7つ？」

「素っ頓狂な声を上げるなよ。7つ作られたんだよ。

ロダン本人が彫り上げた石膏製のオリジナルを型にして鑄造して作ったモノなんだ」

「石膏のものが本物じゃないんですか？」

「確かにマスターという意味では石膏のモノは本物といえるかも知れないけど、本来ブロンズ像として作られたモノなので、鑄造して初めて完成品となる。

だからそう言う意味では鑄造されたこれは本物であり、同じ型で7つ作られた全てが本物になる」

「ふうん。ご主人様、やけに詳しいんですね」

「言わなかったか？ 俺、美術の教師なんだが」

「聞いてません」

「そうだっけ」

しばし沈黙の後、

「え」

A子は酷く困惑した顔でご主人様を見つめた。

「うそーん」

「失礼な。お前は俺が何の教師とってた」

「給食のおじさん」

「どんな教師だそれ！」

「と、言うことは、ですよ……」

「何だよ今度は」

A子は凄く嫌そうな顔をして、

「女学生の前でヌードモデルをやってるんですか！」

「誰がするかそんな事！ 美術の技法や歴史をちゃんと教えておるわっ！」

どんな事をすればそんな発想が、とご主人様は思わず呆れる。

「ちえ。女子学生脱がせてヌードモデルやらせたり、女体版画とかやってると思ったのに」

「A子、そのエロゲ脳は一度、頭の先生に診てもらえ」

「気が向いたら」

A子はそそくさとその場から離れていく。ご主人様は肩をすくめた。

二人はそこから一分ほどで、上野動物園前に到着した。



「子供の頃に来た時とあまり変わってないです」

「うん、俺も前に来た時そう思った。若干変わっているとは思うんだけど」

「前？」

「兎に角、切符買おう。左の奥に窓口があるから」

「あれですね」

「うん。大人一枚で良いよ」

「へ？」

きょとんとするA子に、自慢げに笑うご主人様は財布から緑色のカードを出してみせた。

「へっへー」

「何ですかその定期みたいなものは……あれ、顔写真まで貼ってある」

「1年間出入り可能な年間パスポート券」

「なんですとっ!？」



A子はその年間パスポート券をガン見する。

「大人限定だけど、入場4回分の値段で1年間出入り自由になる」

「何でそんなもの持ってるんですか!？」

「ん」

ご主人様はちょっと困ったような表情を浮かべる。

「前に、ここに来た時にチョットな」

「前に、ですか……？」

A子は勘ぐったような目でご主人様の顔をしばらく覗き込むが、直ぐに膨れっ面になる。

「私もそれがいい」

「元取るには4回以上来ないと駄目だが」

「それでもいい」

「はいはい」

ご主人様、思わず苦笑い。二人は窓口に並んで立った。

「年間パスポートを一枚」

「はい」

窓口の中の女性職員が出来をよく年間パスポートを発行する。

ご主人様は代金を支払うと引き替えに年間パスポートが窓口から出てきた。

それをA子が奪い取るようにつかみ取る。

「あ、あれ……」

それを見て女性職員が戸惑う。

「それ、大人しか使えないのよ」

「私は大人です！」

A子は財布からすかさず取り出した免許証を、窓口の張り出しの上にメンコのごとく叩きつけた。免許証は相変わらず名前と住所はシールで隠したままだった。

「お、おい」

頭を抱えるご主人様。

「あー。済みません、こういうチンチクリンな女ですが、一応成人です」

「は、はあ……」

女性職員は中で吃驚したままだった。

A子はそのパスポートを握りしめ、改札へと向かっていった。

「あれ、お嬢ちゃん、それは大人の」

「私は大人です！」

今度は改札の人を困惑させてるようである。ご主人様はやれやれ、と愚痴ながらその後を追った。

* * * * *

「全く失礼しちゃいます、プンスカ」
「いやあ、流石に初対面の人間は無理だと思うぞ大人と思うの」
「ご主人様まで言いますか！」

A子は改札の前ですっかりブチ切れモードである。ご主人様は仰ぎ、何とか鎮める方法を考えていた。

「あ、そうだ。ちょっとついてこい」
「順路は右じゃないんですか」

A子は、改札の向かいにある案内所へ向かっていくご主人様の後を追った。すると、窓口の手前にある登りに目を奪われる。

「ユビキタス・コミュニケーター？」
「これだ」

ご主人様は窓口で何か借りていたようで、それをA子に突きだして見せた。



「ウォークマン？」
「似てるけどな。これはユビキタス・コミュニケーター。動物園内を案内してくれる端末だ、ほれ」

ご主人様は端末機の画面を指した。

「園内にICタグが設置されててな、それにこの腕時計型のタグリーダーを近づけると画面に動物の動画や説明文が表示される。音声は端末に接続してあるこのイヤホンで聴ける。ほれ首に掛けて」

A子は言われて、ユビキタス・コミュニケーターに取り付けてあるストラップを首に掛ける。

「コレ聴きながら観ると良い」

「ども」

ようやくA子は機嫌を直す。どこか新しい玩具を手にしたような、そんな笑みも浮かべて。

「で、マヌルネコは」

「慌てなさんな。久し振りの動物園だ、のんびり観てまわろうや」

「……ん」

A子はしばし考えた後、うなずいた。

第3巻に続く